呂久の歴史散歩

皇女和宮ゆかりの地と呂久の渡しをめぐる

今は瑞穂市の呂久になっている場所に、天正8年（1580）に織田信長の子の信忠によって呂久川の渡しが設けられました。この頃、信長は天下統一のため、岐阜の城から、京に近く交通の要衝である近江城に居所を移したことから、美濃と京都との交通が頻繁となって赤坂ー呂久ー美江寺ー河渡ー加納の新路線が栄えました。それが中山道となり、皇女和宮降嫁の行列も呂久から船でお渡りになりました。呂久は、水運で栄えると同時に、水害に悩まされた地域でもありました。呂久川（現揖斐川）とともにあった呂久の歴史散歩をお楽しみください。（距離　約1.8km）

白鳥神社

長い参道がつづく白鳥神社は、継体天皇の時代に大河少将が社殿を建立し、日本武尊と弟橘媛命を祀ったのがはじまりと言われています。境内には瑞穂市指定天然記念物の大きなイチョウの木があります。

児童公園

かつては、旧揖斐川が呂久の西を大きくカーブしながら流れていました。ここからは、河川改修後も自然堤防の名残として、うっそうと茂っていた竹やぶや、西の小高い場所にある旧揖斐川の対岸地域の様子が伺えます。

良縁寺

立派な鐘楼のあるお寺です。

昔の石垣

集落は河川敷から徐々に高くなり、このあたりが最も高くなっています。今も残るこれら石積みは、水害から家屋をまもるためにつくられたものです。

馬淵家

呂久の渡しで船頭寄をつとめた馬淵家は世襲となり、苗字帯刀、2人扶持、段木2間を給わり、渡船に関する一切の業務を掌握していたそうです。

即心院

今から250年前の昔、村民の念仏道場として草創され、「清冷庵」と名付けられていました。その後、200年ほど前の呂久の大火で大半が消失しましたが再建され、明治36年（1903）に京都の即心院から寺号と本尊などを呂久の地に移して即心院となりました。

小簾紅園

中山道歩きのオアシスとも言うべき小簾紅園の北側にある休憩所には、昔の呂久の写真や和宮降嫁の際の資料なども展示されています。

神明神社

呂久川（現揖斐川）の河川改修の際に揖斐川廃川埋立記念碑が建てられた場所です。

赤門

りっぱな門構えの家は、この地域では赤門と呼ばれています。かつての呂久川はこの門のすぐ東側まで来ていました。

小簾紅園

皇女和宮降嫁の折、揖斐川（呂久川）を御座船で渡られる際、対岸に紅葉したもみじ葉の散り落ちる様子をご覧になり、それに我が身の悲哀の思いをめぐらせた感慨を歌にお詠みになりました。その場所にできたのが小簾紅園で、主碑には、「落ちていく　身と知りながら　もみじ葉の　人なつかしく　こがれこそすれ」と和宮の歌が刻まれています。

昔の商店があった場所

呂久の渡しは、かつて山や海からの物資の交易の場として賑わい、このあたりには、菓子屋、居酒屋、紺屋、医者、竹屋、桶屋などが軒を連ねていました。

※当時の様子

大島堤防を望む

西に杭瀬川、東に揖斐川が流れる大垣藩は、両河川の氾濫に悩まされてきたことから、上流部に大島堤、前田堤、笠縫堤を築き、周辺住民は輪中と呼ばれる堤を築いて田畑や家屋を守ってきました。

蓮生寺

長享元年（1487）に「鷺休坊」という念仏道場として造立されました。当時はこの村を鷺休（ろく）村と呼んでいました。寛永9年（1632）に蓮妙寺となり、元禄2年（1689）に蓮生寺と改称されました。珍しい聖徳太子立蔵が安置されています

岐阜がつながる 中山道ぎふ17宿 歩き旅

企画　和宮遺跡保存会
制作　中山道ぎふ17宿歩き旅事務局
（日本イベント企画株式会社内）